



さく ぶん ぶ もん にゆう しょう さく ひん
作文部門入賞作品



ない かく そう り だい じん しょう
内閣総理大臣賞

たす あ
助け合い

な ら けん な ら じょ し だいがく ふ ぞくちゅうとうきょういっくがっこう
奈良県奈良女子大学附属中等教育学校2年

よし なか りょう
吉中 涼

ようやく土用干しを終え、父とアゼを歩いていると、カサカサと足元の枯れ草が乾いた音をたてました。二十日間以上雨が続き続いたという東京とは対照的に、僕達の住む桜井は深刻な雨不足です。季節はずれの枯れ草が目につきまます。僕の家周辺には水路に沿って田が並んでいます。その水路に茶色の藻ばかりが流れる日が続きました。田の底にひび割れが出来始めた頃、水不足を解消するため、父と水路の様子を見に行きました。すると、五百メートル程上流に、水をせき止め、横の支流に流しているセキがありました。水不足の原因は、雨不足だけでは無かったのです。

この地域では八十年以上前から、田植えの時は上流の田が優先的に水を使えるしきたりだそうです。下流に行けば行く程、水はあまり流れて来ないこととなります。しかし、穂が実り出す頃になるとその優先権はなくなり、止めてあるセキから自由に水を流すことが出来ると父から聞きました。それを聞いて、僕は少し違和感を覚えました。確かに水不足は困りますが、水の流れが変われば上流の田も困るはずで。今回の様な、水不足の時は尚更です。結局、僕達は大人の腰程の高さの板で止めてあるセキを、ほんの数センチメートルだけ下げて帰りました。上流の田に迷惑をかけないためには、それ以上下げられませんでした。わずかな水がゆつくりと流れ出しましたが、僕達の田に届いてくれる程の水量とは思えませんでした。

父は仕事の都合上、夜しか水の管理が出来ません。水不足も重なって、無事に収穫出来るのか不安でした。しかし数日後、僕達の田にきれいな水が流れ込んでいました。あわてて父に聞くと、近所の農家の方達が昼間に、一キロメートル程上流に行き、川に石でセキを作り、水路に水を引いてくれたおかげだと言うのです。しかも、限られた水を自分達の田だけに入れるのではなく、僕達にも分けてくれました。この行動に、僕は近所の農家の方達の誇りを感じました。

僕は今、中学校の野球部に所属しています。野球に限らず、団体競技ではよく「助け合い」という言葉が使われます。僕は、稲作も団体競技だと思えます。田の面積や年齢はそれぞれ違いますが、地域という大きなチームの中で助け合えば、よりよい結果につながるはずです。祖父は亡くなる前、父に病室で、

「仕事忙がしいから、当分は米作り休んだらええよ。」

と言っていました。伊勢湾台風の年でさえ、米を収穫した祖父が、休めと言うのです。かなり環境が悪かったのでしょう。父も休むつもりで田を耕していませんでしたが、助けてくれたのはやはり地域の方でした。何と、いつの間にか僕達の田を耕してくれたのです。まるで自分の田の様に、ていねいに耕された田は、僕達の稲作を助けてくれました。

僕達の稲作ももうすぐ三年目です。次は僕達が地域の方達を助ける番です。僕はまだ出来る事が少ないけど、父と共に地域の一人として頑張ろうと思えます。地域の方達が助けてくれるのは、優しさと共に、僕達に祖父の稲作だけでなく、助け合う地域の稲作の継承を期待してくれているからではないかと考えます。僕は、桜井に住んでいて良かったと思います。

来年以降、まだまだ不安はありますが、祖父のためにも、これまで助けてくれた地域の方達のためにも、稲作に励みます。地域という大きなチームの中で、助け合いながら、僕達は稲作を継承していきます。